別府の歌物語

後藤武夫

別府温泉のよき時代は、一口に言えば昭和五年より昭和十二年までの、いわば戦争の臭みのなかった時代であった。

昭和八年より十二年まで、当時世界一の豪華船エンプレス・オブ・ブリテン号が、わが「東洋のナポリ」に世界周遊の途中寄港するなど、まさに別府は栄光の時代であった。

その頃、東京では「東京音頭」「桜音頭」と、音頭ものがあの懐かしい「東京行進曲」の銀座の柳を押し分けて流行した。

この音頭の大流行に、別府もまけず「別府音頭」「瀬戸の島々」「別府温泉おどり」「別府行進曲」など地元の歌をぞくぞくと誕生させた。

別府音頭

この歌は、作詞西条八十、作曲中山晋平と言う当時花形コンビの作品で、ビクターレコードから出された。歌手は小唄勝太郎である。

あの〝別府湯の町　ヨサコリャサイサイ〟の歌は、別府の発展にともなってあまりにも有名になりすぎたと言ってもよい。大坂のある宴席で、別府の旦那が〝ヨサコリャサイサイ〟と得意で歌っていたら、

「別府の歌は客に失礼だね。客を目の前において〝ヨサコリャサイサイ〟と言うとは…」と言われた。「なるほど、〝コリャ〟と言う掛詞は失礼かな」と言ったという話を大阪帰りの芸妓から聞いたことを想いだす。

別府生まれ第一号の「別府音頭」こんなエピソードを秘めて今でも盛んに歌われている。

註　別府検番中料亭置屋だて席にて
中央列右の女装が筆者・一人おいて宇都宮親綱氏
その左「吉四六物語」の著者宮本清氏

瀬戸の島々

この歌の作詞は山下彬麿（本名熊埜御堂斉）、作曲は別府民謡協会で歌は田島富江（別府検番芸妓）によってビクターレコードに吹き込まれた、純粋の別府生まれの歌である。

山下彬麿氏は、東大法科出の弁護士さんで、秀才のうえに面白形の好男子であった。田ノ湯の公会堂（現在中央公民館）の裏に住んでいた。私は、夜な夜な三味線の音のひびく浮世小路でよく会った。出会うと「ヨーと」右手を上げかけてニヤリと笑う「よいおっさん」であった。

氏は、その頃亀の井旅館の主人で大きな手のひらをひろげて別府の宣伝にいとまのなかった油屋熊八翁や、その片腕と言われていた宇都宮則綱氏（後衆議院議員）と知り合いになり、梅田凡平氏が検番のおえみ姐さんに渡

りをつけて、この歌が生まれたのである。

余談ながら、別府検番の組合長は中村藤太郎氏で、検番は、料亭三京の横にあり（流川まるしょくの東側　楠町五丁目）、その斜め前に別府を代表とする料亭「なるみ」があった。

名のとうり浮世小路の蔦家から東へ下ると、そこにおえみ姐さんの館（現在「お菓子の司」）があり、私は、ときどき尋ねてめずらしい話をきいた。おえみ姐さんは、芸妓の取り締まり的な睨みのきくわりにポチャ形のよい人であった。

おえみ姐さんと山下彬麿氏とが組んで振り付けまでして、料亭置屋だて席の芸妓であった田島富江に歌わせて踊ったのが「瀬戸の島々」であった。

その頃別府一の雄弁家で、口が悪いと定評のあった宇都宮市議が、「山下くん、“瀬戸の島々波々こえて”とあるけんど、島が波を越えて来るかえー」と言ったことを思い出す。私が、後に「別府温泉おどり」を作詞するときに、宇都宮先生のあ言葉を想い出して最大の注意を払って書いた想い出がある。

別府温泉おどり

この作詞者木下潤は実は私である。選並びに補作は西条八十、作曲大村能章、三味線豊吉・小友、歌は音丸で、コロンビアレコードより発表された。

この歌は、昭和十二年別府市主催の「別府温泉国際観光大博覧会」の記念として、大阪毎日新聞社が行なった懸賞募集に応募して作詞したものである。市長は小野廉・商工会議所会頭西原佐太郎・観光協会会長岡本忠夫氏であった。当時全国より三千数十通の応募者があったが、好運にもこの歌詞が第一位に入選したのである。

私は、この年、応召して入隊していた広島の騎兵学校で入選を知った。懸賞金の金百円と賞状は、友人のキャバレーつるみダスンホール教師の白井佐一氏が受け取ってくれた。

別府温泉おどり

一、おぼろ湯煙り　紫染めて

ハア　別府よいとこ　山と海
お湯の情けに　抱かれて暮らしゃ
いつも春風　夢ごこち
　トコトロリトサ　夢ごこち

二、結ぶ縁を　沙湯が招く
ハア　君と北浜　仲の良さ
ままよ浮名は　かもめの唄に
沖の白帆も　波まかせ
　トコトロリトサ　波まかせ

三、行こか八景　巡ろか地獄
ハア　こころ極楽　バスのうえ
うれし揺られて　より添う笑顔
豊後富士さえ　日本晴れ
　トコトロリトサ　日本晴れ

四、うらら旅衆も　浮かれて踊る
ハア　温泉祭りの　春景色
あの娘齢ごろ　桜は見ごろ
ほろり絵のように　花がちる
　トコトロリトサ　花がちる

このレコードのB面は、作詩西条八十、作曲江口夜詩
霧島昇の歌で

別府通いの汽船のうえで
チラり見かわす顔と顔
あなたもアベック私もアベック
ダンスしましょか　ダンスしましょか　月の下

という「別府行進曲（旧）」であった。

　ともに、博覧会の宣伝カーのマイクで鳴らしながら、県内から中国・四国方

筆者と若葉ちどり

面へも宣伝に繰りだした。

「別府温泉おどり」の二回目の吹き込みは昭和四十四年である。歌手も新人でコロンビアの音頭のベテラン、若葉ちどり・一文字辰也の二人だった。

この年、北浜の突堤で別府市恒例の納涼音頭大会が行なわれ、新進歌手の生の声をきくために数万の観光客で埋地を埋めつくした。実はこの唄は、私にとっては悲恋の歌で今にして思えば感慨無量である。

石垣原合戦口説（くどき）

別府のふるい歌で忘れてならないものは、「石垣原合戦口説」である。

さても大友義統様は　故郷豊後の速見を指して
帰り給うや立石村に　しばし足をも名も留めける
かくと聞きより豊前の国よ　中津城主黒田の如水
悪に長ぜし大友屋形　退治せんとて身構へ給う
豊後横灘鶴見の内に　山を小盾に陣取り給う
都合其の勢八千余騎の　八を三五の二手に分けて
裏と表に立ち分かれ行く　頃は慶長五年の九月
菊の花時十三日よ　朝の卯の刻一番揃い
小栗治右衛門・菅又右衛門　九百余騎程攻め寄せければ
二番掛けには屋形の内の　サッサ吉弘　嘉兵衛様は
九百余騎をば攻め散らしける　さては三番戦の構え
四番掛けには宗像掃部　これぞ井上九郎衛門様
あなた引受け斬入りければ　斬って尽くせしその鉾先に
五番掛けには黒田の陣に　名さえ久野の治左衛門様
これも四軍に軍功ありて　思う心の　侍なれば
今度限りと向かわせ給う　つづく武夫三百余人
ここを大事と六番掛けの　サッサ吉弘嘉兵衛様は
一つ枕に三百余人　斬るは斬れども多勢の相手
七度たたかういくさの中に　一度かげざる鬼神なれど
つかれ果てたる多くの味方　今日を限りと小高き石に
腰を打掛け呼わり給う　敵に名をおう武夫あらば
我を討取り高名せよと　いえど以前の手並みにおそれ
そばに立寄る人なかりれる　時に太郎助十六歳で
人に勝れし後藤や臼ぬき　種が島にて撃ちとめたれば

それが屋形の滅亡となりて　残る軍勢死にものぐるい
馬にうちのりはや十文字　富来陣にぞ向わせ給う
されば味方の嵐につれて散りりばららと逃落ちにける
さても久野の治左衛門様は　年は十九で花やかなれど
物のあわれは義統様よ　やがて黒田にめし取られける
黒田如水は御物語り　手柄先なる御大将と
今の世までも仰がれましょか　緑色ます御塔ねむる
墓のしるしにゃ名も下馬の松

（この口説の節々に踊り子は、ハーエッサ　エッサと手を打ち振り、足を蹴上るように力込め、囃子に合わせて奇声を上げるのが良いと伝えられている）

この口説きは江戸時代後期のものである。

口説きの伝承については、私の祖父後藤近蔵（安政三年生まれ）の父は、鶴見村の郷士で森藩飛地の在官を勤めた孫十郎秀春で、北中・鶴見村の大庄屋直江雄八郎重枝やその子郁蔵と親交があり、郁蔵が重枝が書いたと思われる「石垣原合戦記」を孫十郎に差し出しているが、その合戦記をもとにしてこしらえたものであろうと思われる。

この口説きも、雄八郎重枝の手になるものであろう。重枝は、文化七年の伊能忠敬の測量に際しては森藩の藩命をうけ、鶴見村や犬の馬場などを案内したことが「九州測量日記」に書かれている。また、幻の「鶴見七湯の記」の著者で大変有名な学者であった。

現在歌われているヤッチキは、この口説きが元歌である。

この口説きを今日まで歌い続けてきた口説きの名人を系譜にしてみると、

明治の頃は、
大倉・安部キク　竹ノ内・桑原某　北中・加藤伊平
北石垣・藤内某　南石垣・荒金某・矢田某

大正の頃は、
北鉄輪・柏木亀鶴　明礬・毛利勝重　馬場・板井一
鉄輪・矢野オリ作　中組・中津熊光治

の諸氏である。